

令和5年度3学期四万十町児童生徒指導教員連絡会 議事録（要旨）

1 日時 令和6年1月15日（月）15：00開始～16：45終了

2 場所 四万十町農村環境改善センター 大会議室

3 出席者

町内小中高児童生徒指導担任または代理（16校出席）

山脇光章（教育長）、野村泰子（補導センター所長）、田村ひろみ（窪川警察署）、加賀田太（補導教員）、伊与木裕子（専任補導員）、中脇由美（専任補導員）、田辺真司（専任補導員）

4 傍聴者 0名

5 日程

（1）教育長あいさつ

（2）講演「生きづらさを抱えた若者への支援」

講師 こうち若者サポートステーション 山中 茜 氏

（3）各校からの報告

（4）窪川警察署より

（5）少年補導センターより

（6）情報の共有

（7）閉会挨拶

6 講演・報告・協議

（1）講演「生きづらさを抱えた若者への支援」

講師 こうち若者サポートステーション 山中 茜 氏

講演内容

・サポートステーションについて。

担当エリアはすさき、なんこくの2つ。個人の自由で選んでもらってもよい。交通費は自費。支援対象者15歳～49歳まで。10代～20代が多い。R4新規登録者は234名。就学、学びなおし、不登校など。高校受験の学習支援もしている。不登校48.3%、いじめ31.2%、発達障害26.9%、精神疾患29.8%。（重複もあり。）支援プログラムは個別支援、伴走支援。切れ目のない支援をしていく。連携支援として就職後も一年間サポートする。悩み事などにも支援。就職前は漠然とした悩みだが就職後は上司の悩みなど具体的になる。利用者の状況では高学歴登録者が増加（ここ数年で大学、院の利用者が30%）。幼少期から問題を抱えている。早い時期からの登録が支援しやすい。

・生きづらさについて。

利用者の8割が生きづらさを抱えている。最近の傾向として自信がない、外に出ずひきこもる人が多い。居場所がない、将来の展望が持てないなど。発達障害や家庭の問題もある。保護者の悩み（自分を責める。子育てに自信をなくす。孤立感。）もあり、保護者にも支援が必要。保護者が自信をもって社会とつながる姿を見せることが大事。本人は理想と現実のギャップに悩む。

働くために必要なことをやりたいけど難しい。一番苦しいのは本人。信頼できる大人の必要性。自分らしく生きていくこと→自分を大切に思える、自分を知る、生きているだけで十分という気持ち、相談できる人がいることなどが土台となる。ひきこもりが生まれる社会→かくしたい。知られたくない。→家族の支援、孤立しやすい→地域の支援が必要。本人、家族が支援で目指すもの→どこかで自分をリスペクトしてほしい。本人を変えようとする追い詰めてしまう。ひきこもることの偏見をなくす。新しい人生の始まりを知る。

・ケース 1。

15歳。児童相談所からの紹介。高校休学。ゲーム依存。昼夜逆転。ゲームで賞金稼ぎ。主訴はアルバイトしたい。母への家庭内暴力、継父と不仲。妹弟は本人を怖がる。→祖父母と住む。ひきこもり。小3でADHD、LDの診断。母親の気持ちとしては、私のせい。今は悪魔のよう。誰にも知られたくない。アルバイト→履歴書の練習、ピンクの髪、スーパー不採用、コンビニ3か月。本人は、こもりびとになりたい。成人するまで何もしない。高校は行ける気がしない。担当者の関わり→本人の話を聴く。ほめる。母親は寂しいのでは？実父からの手紙を読んで本人に変化のきざし。高校認定試験を2回受験。漫画「子どもを殺してくださいという親たち」(押川たけし著)を読んで、働きたいと言い出し面接に行ったが不採用。本人の変化が母との関係、妹弟との関係、母親の変化(自分の事しか見えていなかった。本人を尊重する。)につながっている。(状況の改善)

・ケース 2。

高校3年生。高校からの紹介。集団は苦手。静かな環境でないと会話ができない。マフラーは吐き気がする。中2で不登校。父母のはざま(母は理解がある。父は厳しい。)。優秀な弟との比較。心の支えはフライゴン(ポケモン)。本人は働きたくない、家にひきこもりたい。求人の応募は父親しだい(正社員じゃないとダメ)。サポートステーションでの支援→自信を持てるように支える。自己選択、自己決定を行う力をつけ、自己実現できるための支援を行う。セミナーではスポーツに参加。就職体験は2日でやめる。自分の目標は家を建てること。スモールステップで面接練習。仕事は不採用が続くがあきらめない(ハローワークからご本人があきらめなければ必ず就職できます!)。アルバイトに採用されたあと本人に変化あり。

・質疑応答

Q.今日紹介されたケースは障害(ADHD、LDなど)の認定を受けたケースなのか。

A.受けていない。決めるのは本人なので進めても受けないこともある。障害のあるなしにかかわらず、また、ひきこもりが長く学力がほとんど身につけていない人もいれば高学歴の人もいる。その人の希望に沿った支援を心掛けている。

Q.今のスタッフが抱えている人数は？

A.すさきの2名で10名ずつ20名くらい。こちらのほうでは所長1名、スタッフ7名でスタッフ一人10名～15名、計100名程度抱えている。毎日コンスタントに来ているわけではない。ばらつきはある。

Q.高学歴の人が増えた要因は？

A.社会に出るまでは学校など守られた場所にいるが、いざ社会に出ると本人の資質が色濃く出る。そこでつまづく。高学歴だから社会になじめるということではない。生きていく力が備わっているかどうか。生きづらさ(少数派の人たちの苦しみ)があり、偏見がある。学歴だけでははかれない。学生時代は特性が見過ごされやすい。

Q.小中学校時代にやっておいたらよいことは？

A.認めてもらえる、満ち足りた気持ちが一番大事。勉強も大事だが、安心安全を感じる場所が家庭や学校。生きていてもいいんだと思える場所が必要。先生方が常に認めてあげる。心が満たされることが大事。

Q.高校では卒業時に必ずサポステの紹介をする。サポステの支援の難しさは？

A.紹介してもらうことが大事。必要なタイミングで思い出してくれたら。支援するうえでは信頼関係を大切にしている。自由な発言が許されること。

Q.時間外の対応は？

A.基本的には時間内の支援。深夜に来てくれと言われても対応できない。

(2) 各校からの報告（前回以降で何かあれば） 特になし。

(3) 窪川警察署より（前回以降で何かあれば） 特になし。

(4) 少年補導センターより

情報、報告等 いじめの件、無断写真撮影の件、2月育成事業募集チラシの件。

(5) 情報の共有

○補導センター

- ・学校ネットパトロールについて。該当校への連絡と対応のお願い。
- ・ネットにおける個人情報漏洩の危険性→SNS 上での個人情報の取り扱いについて。保護者の投稿についても必要なら連絡を。補導センターの活動での写真撮影については必ず確認の上で使用している。

7 閉会あいさつ 四万十町少年補導センター所長 野村泰子